

2017年10月1日

福音書からのメッセージ

この二人のうち、どちらが父親の望みどおりにしたか。」彼らが「兄の方です」と言うと、イエスは言われた。「はっきりしておく。徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国に入るだろう。

(マタイによる福音書 21 章 31 節)

イエス様のたとえ話には、二人の兄弟が登場します。二人はお父さんから、ぶどう園へ行って働いてほしいと頼まれます。二人の反応は対照的でした。兄は父に対して、きっぱりと断ります。「いやです」と。でも弟は違いました。「承知しました」、理想的な答えです。

この返事の通りに、弟がぶどう園に出かけ、兄が家でゴロゴロしていたとしたら、物語は簡単でした。兄が怒られ、弟が褒められる。誰にでもその様子は想像できるし、納得することでしょう。しかしイエス様のたとえ話では、そうはいきませんでした。

「承知しました」と言ったはずの弟は結局ぶどう園に行かず、「いやです」と答えた兄は「考え直して」ぶどう園に出かけていきます。何とひねくれた兄弟だと思えますが、イエス様の言葉から、弟はユダヤ教の指導者たちであり、兄は徴税人や娼婦たちをさしているところがわかります。

ユダヤ教の指導者たちは、神さまの言葉に従い、敬虔に歩んでいると自負していました。ところが神さまの恵みを自分たちだけで享受し、周りの人たちを排除していきます。神さまから見たらその姿は、ぶどうの実を食べるだけ食べて、その収穫には参与しようとしなない、結局ぶどう園に行かなかった弟の姿と同じなのです。

一方徴税人や娼婦と呼ばれる人たちは、神さまから遠く離れたところにいると思われていました。神さまの恵みは、彼らになど与えられない、そう誰もが考えていた



のです。本人たちもそう思っていたことでしょう。どうして神さまの恵みが感じられないのに、ぶどう園になど行かなければならないのか。

しかし彼らの元に、イエス様が来られま

した。イエス様は彼ら徴税人や娼婦たちのように、人々から蔑まれ、相手にされなかった人たちと交わり、食事をし、手を差し伸べられたのです。彼らはイエス様に出会い、その心の向きを、神さまへと変えられました。そしてイエス様に従い、歩いていくのです。それが「ぶどう園に行く」ということです。

わたしたちも呼ばれています。何度わたしたちが「いやです」と言ったとしても、いつかきっと、神さまに心を向けてほしいと。与えられたぶどうの実を自分だけで食べて満足せずに、周りの人に分け与えてほしいと。そのために、ぶどう園に行って収穫を手伝ってほしいと。

「考え直して」、わたしたちはぶどう園に行くことができるのでしょうか。「神さま、わたしが何をすればよいのか、お示してください」と祈ることができるのでしょうか。神さまはその思いを待っておられます。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>